第　39　号

県中教研 保健部会だより

発 行 日　令和6年3月
発 行 所　富山市千歳町1－5－1
富山県中学校教育研究会
編集責任者　井沢　悦子
題　　字　金山　泰仁　先生

居心地のよい保健室

指導主事　永原みどり

「保健室に行ってきていいですか。」１人の児童が担任に聞くと「私も。」と続きます。小学１年生の教室でよく見る光景です。保健室から戻ってくると、けがの手当てをしてもらったことや自分の体の様子について満足そうに話してくれます。

生徒にとって「保健室」は、小学生の頃から心安らぐ場所です。養護教諭に、自分の体の痛みや不安な気持ちを親身になって聞いてもらえることが、生徒の安心感につながるのだと思います。心と体の専門的な立場から、生徒を支えている養護教諭の存在は大きいと考えます。

現在、心の健康や性の問題、薬物乱用等、課題は多くあります。予期せぬ問題にも対処できるよう、生徒の資質・能力を育成することが求められます。そのためには、生徒自らが当事者意識をもち、健康課題について考えることが大切です。

「講義５％、グループ討論50％、体験学習75％、人に教える90％」。これは、学習方法と学んだことの定着率を示したデータです。保健学習においても、主体的・対話的な学びとなるよう、学習方法を工夫することが望まれます。

保健体育科では、小学校から高等学校までの学習の系統性を考え、保健分野と体育分野の関連を図り、確実に学習内容を指導すること、保健教育においては、教科等横断的に年間指導計画を立て、専門機関と協力し、教育活動全体で学べるようカリキュラムを工夫することが大切です。また、生涯にわたり、生徒が健康な生活を過ごすためには家庭や地域との連携は欠かせません。

養護教諭には、多くの役割が期待されています。１人で抱え込まず、チーム学校として対応していただきたいと思います。そして、専門性を生かし、進んで健康課題を発信し、「居心地のよい保健室」を今後も築いてほしいと思います。

（東部教育事務所）

支援の輪の中で

部長　井沢　悦子

頭痛や腹痛等の体調不良での来室だけではなく、「友達関係の悩み」や「大勢の人がいるところが苦手」「家族への悩み」など、心のケアを必要とする生徒の来室が以前よりも増えていると耳にすることが多くなりました。心の健康課題への生徒支援として、どのような関わり方がよりよいのかと考えることがあります。

今回の富山地区の提案発表では、現代の喫緊課題である「心の健康課題」に対し、全体への予防的援助や個々の生徒の状況に応じたチーム支援での養護教諭の役割や支援の在り方についての取組が報告されました。提案発表後のグループ協議では、令和４年に改定された生徒指導提要に関する発言が多く見られました。生徒指導提要の中に「養護教諭」という文言が60カ所あり、健康情報、健康相談等の保健室の機能的な文言も出てきます。特に、不登校、性に関する課題、精神疾患に関する理解と対応、自殺等の心の健康課題や生徒指導における健康課題への対応と関わりに対し、チームとして対応する上で養護教諭は、問題の発見、情報収集、予防的・治療的相談者としての心のケア、担任や保護者への支援、関係機関との連携等、幅広い役割の担い手であると位置付けられています。改めて学校内での役割を自覚する必要があります。

そこで、健康相談担当者として、データを収集、分析、管理し、教職員と連携を図る手段の一つとしてICTを活用し、養護教諭の視点からの気付きを伝える発信力を高め、教職員や多職種の専門家、外部とも連携を図りながら、心の健康課題への生徒支援を進めていきたいと思います。

そして、今後も生徒が「安心して話を聞いてもらえてよかった」と思える保健室経営に努めていきたいと思います。

（富・奥田中）

第67回　研究大会報告

10月12日（木）富山市立速星公民館において研究大会が開催され、全地区から80名が参加した。

研究主題を「生涯にわたって主体的に心身の健康づくりに取り組み、健康で安全な生活を営む資質・能力を育てる健康教育はどのようにすればよいか」とし、富山市中教研保健部会の澤中希美養護教諭（芝園中）と五十嵐沙紀養護教諭（三成中）から、心の健康課題に関する取組について提案発表があった。

○発表内容と部会協議

健康づくりノートの令和２年度富山市集計結果では、「よくイライラする」「心配事や悩みを誰にも聞いてもらっていない」と答える生徒が増加していた。さらに、保健室来室時の生徒の様子から養護教諭が感じる実態や、各種調査結果の推移等から心の健康課題が明確になった。そこで、生徒の健康課題の解決に向けて、教職員や関係機関、専門家がチームとして連携し支援するための、養護教諭の役割や支援のあり方について研究を行った。

チーム学校の中での養護教諭の役割と支援の在り方について、学校心理学で活用されている石隈利紀先生の「心理教育的援助サービス」の考えを基に、３つの援助対象への支援の実践と成果が紹介された。「すべての生徒への予防的援助」では、心の健康をテーマにした学校保健委員会や学年集会、保健体育科のストレス対処の指導、教職員に対する研修会等の実践が紹介された。「苦戦している生徒の早期発見・早期対応」では、心の健康課題を把握しやすいように保健室来室カードの項目を工夫したことで、生徒は自分の気持ちを表出しやすくなり、養護教諭も発見・対応がしやすくなった。「特別なニーズをもつ生徒へのチーム支援」では、事例を通して富山市専門医制度の活用や教職員との連携のあり方について発表された。これらの実践を通して、関係職員の連携体制づくりが最も重要であることが分かった。

提案発表後の部会協議では、グループに分かれ、富山市の発表を基に協議題「チーム力を生かした心の健康教育に取り組むための養護教諭の役割はどうあればよいか」について、自校の取組や課題等を交えて活発な話合いが行われた。その後、各グループでの協議内容を発表し全体で共有した。

○指導講話

永原みどり指導主事（東部教育事務所）から以下の助言を頂いた。

- 生徒との関わりの中で、養護教諭が感じる生徒の実態や健康づくりノート等のデータから読み取れる実態について、現代的な課題を基に焦点化された取組であった。
- 学校保健委員会においては、年間指導計画を立案し教職員へ周知を図るなど、カリキュラム・マネジメントの視点で行うことが大切である。また、SC等の専門家と連携して行うことで、生徒の知識がより確かなものになる。
- 保健関係の様々なデータを関連付けて分析することは、生徒の実態を把握する上で重要である。データ分析やオンデマンドによる授業への参画等、ICTの活用を工夫していく。
- 養護教諭の日頃の声掛けや配慮等がチーム支援につながる。職務内容によっては、学校で役割を明確にし、協力して進めることが大切である。

これからも、学校のチーム力を生かしながら、生徒の主体性を大切にした活動や、生徒が自らの健康課題に気付き、行動変容ができるような研究を進めていきたい。

六郷　恵子（高・芳野中）

養護教諭の専門性を生かした心の健康問題への支援

講師　国士舘大学　文学部教育学科　教授　鈴木　裕子 先生

１　近年の養護教諭の現状と課題

頻回来室者への対応、増加する登校しぶりや不登校への対応、保健室登校の受け入れ、心のケアや虐待への対応、健康課題の多様化、児童生徒の多様性、教職員との連携等、養護教諭が行うことは多岐に渡り、多忙化している。その中でも、特に心の健康課題は多様化しており、養護教諭一人ではなかなか担いきれない現状にある。

２　養護教諭の専門性を生かすとは

養護教諭の職務は、健康課題に応じて変化してきた。心の健康問題に関しては、平成九年の保健体育審議会答申で「健康相談活動」が養護教諭の新たな役割として初めて示された。養護教諭が行う健康相談活動とは、常に心的な要因や背景を念頭に置き、心身の観察や背景の分析・関係者との連携などにより心と体の両面への対応を行うものである。養護教諭には、免許法に裏付けられた専門的な資質・能力・技術と、教育職員としての教育機能をあわせもつ他の職種にはない専門性がある。「心と体の両面」に関わる専門性をもつのは養護教諭だけである。

平成二十七年の答申では、「チーム学校」の中で養護教諭が、心身の健康に問題をもつ児童生徒の指導や生徒指導面でも大きな役割を果たしていることなどが示された。平成二十九年発行の冊子「現代的健康課題をかかえる子供たちへの支援」には、養護教諭の役割を中心とした支援の在り方が示されている。

養護教諭の職務の特質には、「全校児童生徒を経年的にみる」「個別と集団両面で関わる」「いつでも誰でも利用できる保健室を経営し、問題を抱える児童生徒との接点が多い」「心の問題は身体症状として現れやすく救急処置等で問題を発見しやすい」などがある。つまり最も期待されているのは、心身の健康問題の早期発見である。養護教諭だからこそ気付けることがあると自覚し、自信をもって発信してほしい。発信力を付けることが大事である。

心の健康に関する教育を行う場合も、生徒の実態から養護教諭として気付いた課題を他教員と共有し、いつ、どのように指導するかを組織的に提案していく。その際、各学校のカリキュラムの確認が必要である。その上で、「集団指導」と「個別指導」を組み合わせることが効果的である。

一人一人に応じた支援では、組織の中での役割を常に意識する。ケース会議で組織的に検討する際に、養護教諭の役割も決め、共通理解のもと支援を行う。連携で大切なのは、理解を求めるだけでなく相手を理解しようとすることである。加藤秀俊氏（社会学者）の著書「人間関係」の中に、「人間関係とはコミュニケーションの累積だ」とある。コミュニケーションを重ね、相互に理解を深めて信頼関係を築くことが、よい連携、よい支援につながる。

３　大切にしていきたいこと

多様化・多忙化する職務の中では、養護教諭にしかできないことに重点を置き、仕事に優先順位をつけることも必要である。今後は情報共有手段としてICTの活用も工夫しながら、教職員や養護教諭の仲間と助け合っていくことで、結果的に多忙化の軽減につながるのではないか。養護教諭は一人職だが、一人ではない。みんなでチーム力を高めていくことが、結果的に子供たちの課題解決につながると考えている。

五十里麗子（黒・清明中）

熱中症予防に関する取組

氷見市では､独自の「健康づくり指標」を定め、保健教育に取り組んでいる。今年度は、部員で共同作成した「熱中症予防」についてのスライド資料を活用して、研究に取り組んだ。

－学級活動での取組－

各学校では、学校の実態に合わせスライド資料を修正し活用した。ワークシートは、生徒が日頃の生活を振り返ったり、授業を通して熱中症予防の理解度をチェックしたりできるようにした。また、事後学習では、熱中症予防週間を設け、予防の行動がとれたかどうかのチェックを行った。

－生徒会保健委員会での取組－

保健委員会で熱中症予防に関する集会を行ったり、ポスターや放送で熱中症予防を呼び掛けたりした。集会はクイズ形式で行い、生徒は正解だと思う番号の方へ移動するようにした。ただ聞いているだけではなく、自分の考えをもって参加する必要感があり、主体的に熱中症予防について学ぶことができた。また、一人で学ぶのではなく、他者と関わりながら学ぶ機会となったことでより生徒の興味・関心を高めることができた。

－栄養教諭との連携－

熱中症予防には「水分補給」だけでなく日頃の生活習慣も重要であるため、栄養教諭と連携して、朝食や睡眠に関する保健指導を行った。後日、生徒会が中心となって「朝ご飯コンテスト」を計画し、全校生徒が学習した内容を基にして夏季休業中に朝ご飯を作る活動に取り組んだ。コンテストのレポートを学習発表会で掲示したことで、全校生徒や保護者への啓発につながった。

－今後に向けて－

今後は、課題解決に向けて思考を促したり、深めさせたりする指導方法や教材・資料の工夫を研讃し、生涯を通じて生徒が自らの健康や安全の基礎となる資質と能力を育成していきたい。

長野智華子（氷・十三中）

実践事例研修と学習会の取組

砺波地区では、部員の実践を基にした研修を継続して行い、各校での実践につなげている。令和４年度の「効果的なICTの活用」についての事例研修では、養護教諭が健康教育や日々の執務にICTを積極的に取り入れていくことで、指導の幅を広げ、生徒の学びや生徒同士の関わる場面の工夫、教職員との効果的な連携に結び付くことを学び、具体的なICTの活用方法について情報を共有した。また、令和５年度の「義務教育学校の保健教育の取組」と「授業実践を中心とした健康教育」の事例研修では、９年間を見通した系統的・継続的な健康教育構想や、生徒の多面的な実態把握の手立て、生徒が見通しをもって課題追及する導入の工夫､学ぶ目的や必然性のある課題設定により、生徒に疑問や興味を感じさせる学習活動の工夫について、協議を行った。

さらに、各部員がこれらの研修内容を生かし、生徒の健康観察、保健指導や生徒会委員会活動等において、各校で積極的にICTを活用して、健康によい生活を主体的に選択、判断、行動できる生徒の育成につながる実践に取り組んでいる。

また、専門家を講師に招いた学習会を毎年開催し、養護教諭の資質向上を図っている。令和５年度は、「子どもの理解と支援～ SOSの受け取り方～」（富山県こどもこころの相談室代表 臨床心理士 深澤大地先生）の講義と演習を通して、保健室での生徒対応における養護教諭としての基本的態度、アプローチ方法や声の掛け方等を習得することができた。

市や学校によって実情は異なるが、今後も実践事例を基にした研修と養護教諭の資質向上を図る学習会を重ね、共通の土台の基に、各校での実践に取り組んでいきたい。

石崎　妙子（砺・庄川中）